

道徳(中学校)

道徳の時間の指導における配慮事項は何か。

道徳の時間の指導における配慮事項は、以下の5点である。

- 1 道徳教育推進教師を中心とした指導体制の充実
- 2 体験活動を生かすなどの指導の充実
- 3 魅力的な教材の開発や活用
- 4 表現し考えを深める工夫
- 5 情報モラルの問題に留意した指導

道徳教育推進教師については、『指導計画の作成と内容に記述されている「校長の方針の下に」と「道徳教育推進教師」とはどういう意味か。』を参照

1 道徳教育推進教師を中心とした指導体制の充実

(「第3章道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3)

- (1) 校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実すること。

校長や教頭などの管理職、他の教職員とのチーム・ティーチング、養護教諭や栄養教諭などと協力しての指導等、学校の教職員が協力して指導にあたることのできるような計画作りなどを、学校としての方針の下に道徳教育推進教師が中心となって進めることが大切である。

道徳の時間を実施しやすい環境づくりに努めることが重要である。道徳の時間に使用する教材や図書の準備、掲示物の充実、資料コーナー等の整備などを全教師が分担して進められるように道徳教育推進教師が呼びかけたり、具体的な作業の場を作ったりする。

2 体験活動を生かすなどの指導の充実

「職場体験活動」は新たに加えられた

(「第3章道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3)

- (2) 職場体験活動やボランティア活動、自然体験活動などの体験活動を生かすなど、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。

道徳の時間においては、体験活動を効果的に生かすことによって、道徳的価値の自覚を深める指導が一層充実する。道徳の時間は体験活動を踏まえて、生徒が様々な道徳的価値に気づき、それに基づいた人間としての生き方についての自覚を深める要の時間として重視していくべきであり、道徳の時間で直接的な体験活動そのものを行うのではないことに留意する。

道徳の時間で体験活動を生かす方法は多様に考えられ、各学校で生徒の発達の段階等を考慮して計画に位置付け、実施できるようにすることが大切である。

例えば、

ある体験活動の中で感じたことや考えたことを道徳の時間の話し合いに生かすことで、指導の場をつなげ、生徒の関心を深める方法などがある。また、体験活動の活動内容と似た題材等を道徳の時間で生かし、それぞれの指導相互の効果を高める工夫もある。

具体的には、

その時間のねらいに効果的に迫らせるために、道徳の時間の中で、役割演技や実際にそのものに触れてみるなど体験的活動を学習指導過程上に位置付けて行うことをさらに充実させる必要がある。

3 魅力的な教材の開発や活用

(「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3)

- (3) **先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して**、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと。

教材の開発や活用に関して、「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒が感動を覚えるような魅力的な教材」と具体的に例示し、主として指導方法にかかわって創意工夫ある指導を行うことを明確にした。

道徳の時間の目標の達成を図り、生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが大切である。

(1) 道徳の時間に生かす教材

道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件として、まず次の点を満たすことが大切である。

- ア 人間尊重の精神にかなうもの
- イ ねらいを達成するのにふさわしいもの
- ウ 生徒の興味や関心、発達に応じたもの
- エ 多様な価値観が引き出され深く考えることができるもの
- オ 特定の価値観に偏しない中立的なもの

教材を選定する教師自身が感動を覚えてこそ、よい教材であるといえる。生徒がより学習に意欲的に取り組み、学習への充実感を持ち、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方について自覚を深めることができるようにするために、更に次のような要件を具備する教材を選択するよう心掛ける。

- ア 生徒の感性に訴え、感動を覚えるようなもの
- イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられるもの
- ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができるもの
- エ 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの
- オ **悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの**
- カ 多様で発展的な学習活動を可能にするもの

今回新たに追加された事項である。

(2) 教材の開発と活用の創意工夫

教材の開発に当たっては、日常から報道や書籍、身近なできごと等に強い関心をもつとともに、柔軟な発想をもち教材を広く求める姿勢をもつことが大切である。

具体的には、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材として、生徒が感動を覚えるような教材の発掘に努めることが求められる。

先人の伝記

多様な生き方が織り込まれ、生きる勇気や知恵などを感じることができるとともに、人間としての弱さを吐露する姿などにも接し、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができる。

自然

自然の偉大さや生命の尊さなど感性に訴えることができる。

伝統と文化

その有形無形的美しさに郷土や国への誇り、愛情を感じることができる。

スポーツ

実際に活躍するアスリートなどのチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩などに触れて道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めることができる。

これらの他にも、例えば、名作、古典、随想、民話、詩歌、論説などの読み物、地域の文化やできごと等に取材した郷土教材、映像ソフト、映像メディアやインターネットなどの情報通信ネットワークを利用した教材、実話、写真、劇、漫画、などの多彩な形式の教材に着目することが大切である。保護者や地域の人々が直接生徒に語りかける体験談や願いは、生徒の心に強く訴えるものとして活用することができる。

4 表現し考えを深める工夫

全教育活動で重視する言語活動に関するものとして、道徳的価値の形成を図る観点から、自己の心情や判断等を表現する機会を充実して、自らの成長を実感できるようにすることを重視した。

(「第3章道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3)

- (4) 自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。

学校の教育活動全体で言葉を生かした教育の充実が求められている。言葉は、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤である。道徳の時間においても、その言葉を生かした教育についての充実が図られなければならない。

(1) 道徳の時間における言葉

道徳の時間は、国語科での言葉にかかわる基本的な能力を基本に、体験などから感じたこと、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論や討議などにより、意見の異なる人の考えに接し、協同的に議論したり、意見をまとめたりする。

例えば、資料の内容や登場人物の気持ちや行為の動機などを考える。友達の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたり、話し合ったり、書いたりする。学校内外での様々な体験を通して感じ、考えたことを、道徳の時間に言葉を用いて生かし合ったりすることなど。

(2) 自分の考えを基に表現する機会の充実

道徳の時間のねらいに迫るために、個々の生徒や学級の実態に応じて、自分の考えを基に、書いたり討論したりするなど表現する機会を充実することが大切である。

○ 書いたり討論したりするなど表現する機会の充実

生徒は書く活動を通して、

- ・ 自分自身のものの見方、考え方、感じ方などを確かめたり、まとめたり、記録に留めたりすることができる。
- ・ 今までの自分のものの見方、考え方、感じ方などを振り返ることもできる。
- ・ 例えばロールレタリングなどによって他者のものの見方、考え方、感じ方を推し量ることもできる。
- ・ 討論することなどを通して、自分の意見と他の生徒の意見を突き合わせて、どこが同じでどこが違うのかなどを確かめることができる。

書いたり討論したりするなどの表現する機会は、道徳の時間において、生徒が自分自身の感じ方や考え方を言語化することによって、自ら考えたり見直したりしていることを明確にすることにつながる

生徒が自分自身のものの見方、考え方、感じ方を明らかにすることは、自分の意見がどのようなことを根拠にしているのか、どんな理由によるものなのか、その拠り所を明らかにする過程でもあり、「なぜ」「どうして」とさらに深く自己や他者と対話することで、自分自身を振り返り、自らの価値観を見つめ、見直すことになる。すなわち、道徳の時間のねらいである道徳的価値及びそれに基づいた人間としての自覚を深めることを促すことになる。

例えば、終末の段階での書く活動を通して、その時間の学習を振り返ることに当てることが考えられる。また、展開の段階などで、討論などを通して、資料中に描かれている登場人物等の行為、行動や他の生徒の意見を手掛かりに自分自身の考えを練り上げていくなどということが考えられる。

「書いたり討論したりするなど表現する機会の充実」が、「書いたり」「討論したり」という手立て、方法などの活動だけを意図しているのではない点について留意する必要がある。

5 情報モラルの問題に留意した指導

情報化の影の部分への対応を重視した。

(「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の3)

- (5) 生徒の発達の段階や特性等を考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導に留意すること。

社会の情報化が進展し、コンピュータや携帯電話等が普及することにより、情報の収集や表現、発信などが容易にできるようになったが、その一方で、情報化の影の部分の深刻な社会問題になっている。生徒は、それらを日常的に用いる環境の中に入っており、学校や生徒の実態に応じた対応が学校教育の中で求められる。これらは、学校の教育活動全体で取り組むべきものであるが、道徳の時間においても同様に、情報モラルに関する指導に配慮していかなくてはならない。

(1) 情報モラルと道徳の内容

情報モラルとは？

道徳の時間においては、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、例えば、情報モラルに関する題材を生かしたり、情報機器のある環境を生かすなどして指導に留意する必要がある。

情報モラルとは情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度ととらえることができ、その内容としては、個人情報保護、人権侵害、著作権等に対する対応、危険回避やネットワーク上のルール、マナーなどが一般に指摘されている。

道徳の内容との関連を考えるならば、例えば、ネット上の書き込みのすれ違いなど他者への思いやりや礼儀の問題及び友人関係の問題、情報を生かすときの法やきまりの遵守に伴う問題などがある。

(2) 情報モラルへの配慮と道徳の時間

情報モラルに関する指導について、道徳の時間では、その特質を生かした指導の中での配慮が求められる。

指導に際しては、

- 情報モラルにかかわる題材を生かして話し合いを深める。
- コンピュータによる疑似体験を授業の一部に取り入れる。
- 生徒の生活体験の中の情報モラルにかかわる体験を想起させる。
などの工夫などが考えられる。

具体的には、例えば、

- 相手の顔が見えないメールと顔を合わせた会話との違いを理解し、メールなどが相手に与える影響について考えるなど、インターネット等に起因する心のすれ違いなどを題材とした指導
- ネット上の法やきまりを守れずに引き起こされた出来事などを題材として授業を進めること など

他者への共感や思いやり、法やきまりの持つ意味などについて生徒が考えを深めることができるように働き掛けることが重要である。

道徳の時間は、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼をおくのではなく、道徳的実践力を育成する時間であることに留意する。